1994.4
第18号

博物館だより

大津市歴史博物館

木造薬師如来坐像　鎌倉時代　重要文化財
（滋賀　西教寺　像高 88.7cm）

真盛上人遠忌500回記念特別展

「西教寺と天台真盛宗の秘宝」を開催

4月23日（土）～6月5日（日）

木造阿弥陀如来倚像　鎌倉時代　重要文化財
（三重　成願寺　像高27.1cm）

十念名号　真盛上人筆
室町時代
（滋賀　西教寺）

〈主な展示作品〉

重文　紙本墨書真盛上人号　西教寺蔵
重文　絹本著色持鉢釈迦如来像　西教寺蔵
重文　木造薬師如来坐像　西教寺蔵
重文　彩箋墨書法華経　西教寺蔵
重文　銅鰐口　西教寺蔵
重文　木造如意輪観音坐像　持宝寺蔵
県文　木造阿弥陀如来立像　西勝寺蔵
　　木造阿弥陀如来及び両脇侍像　善通寺蔵
重文　木造阿弥陀如来倚像　成願寺蔵
重文　絹本著色阿弥陀四尊来迎図　西来寺蔵
県文　紙本墨書真盛上人書状　西蓮寺蔵
市文　銅水瓶　引接寺蔵

特別展の概要

大津市坂本に所在する天台真盛宗の総本山西教寺は、室町時代の高僧真盛によって中興された寺です。真盛は伊勢国（三重県）に生まれ、比叡山で長く修行ののち、広く念仏による極楽往生を説いて人々を教化しました。人の道・仏の道にはずれた行為を戒め、天皇や貴族、大名から地侍、百姓衆にいたる広範な帰依をえて、各地で寺の建立や再興につとめた結果、真盛を宗祖と仰ぐ寺々は、滋賀・三重・福井の三県を中心に数多くみられます。

本年は真盛の遠忌五〇〇年目の大きな節目の年です。これを記念して本展では、真盛の生涯とその思想に関わる品々や、天台真盛宗の寺院に伝来した豊かな仏教美術の名品を一堂に会し、その文化史的な意義について考えます。

展示総数は九二件、そのうち重要文化財が二六件、県指定文化財が一一件、市・町指定文化財が八件含まれており、ほぼ半数にあたる四五件の展示作品が指定文化財ということになります。内容的には、絵画・彫刻・工芸品・書跡・典籍・歴史資料等、多くのジャンルにわたるバラエティに富んだものです。

また、西教寺客殿に安置される秘仏薬師如来像（京都岡崎の法勝寺伝来、重要文化財）など、ふだんはその姿をみることのできない作品も多数あり、仏教美術を愛好する人にとって千載一遇の好機といえましょう。

収蔵品紹介⑰

歌川国長筆　近江八景図

横九つ切判錦絵　八枚

江戸時代　縦一一・五cm　横一七・七cm

今回ここに紹介するのは、浮世絵師・歌川国長の作になる錦絵の近江八景である。本作は版元名を欠くなど傍証に乏しいが、その作風や色版から推して版行は文化年間（一八〇四～一八）より文政一〇年（一八二七）までとみて大過ないと思われる。

この時期は、葛飾北斎とその門人をはじめとして、渓斎英泉や歌川派・勝川派の一部の絵師が、相次いで、西洋的な風景表現をねらった作品を制作した。もともと浮世絵風景版画の世界においては、一八世紀の半ば延享（一七四四～四八）年間頃、西洋版画や中国の蘇州版画の透視図法を意識した「浮絵」とよばれる風景版画が盛んに制作されていた。これらの作品は、誇張された線的遠近法による寺院楼閣や町並み、運河や橋といった構築物を構図の中心にすえて、飛び出るような景観を描いたものであった。そこに、天明（一七八一～八九）以後の、司馬江漢や亜欧堂田善による銅版画や油絵の制作による浮世絵師への影響が加わると、それまで、もっぱら遠近法へ向けられていた絵師の興味が全般的な異国趣味へ移り、彫摺・表現、双方における実験的で新奇な作品が数多く登場する。中でも、北斎は、寛政（一七八九～一八〇一）末年から文政頃にかけて、いくつかの洋風の風景版画の揃物を発表しており、斬新な作風として少なからずの追随者を生んだものと思われる。国長もまたそのひとりといえよう。

そもそも国長は初代歌川豊国の門人であるが、この近江八景では、北斎の「銅板近江八景」からの図様やモチーフの形態の転用が随所に認められ、浮絵の構図を継承しつつも、新しい画風を摂取しようとする国長の姿勢がうかがえる。

図版は、その内の一図の堅田落雁である。まず、画面中央にクローズアップされた浮御堂が印象的である。てっぺんの宝珠が省略された屋根は、その傾斜といい張出し具合といい非常に鋭角的に描かれている。

加えて、銅版画風の墨線によって施された陰影はさらにそれを際立たせている。これは、明らかに「銅板近江八景」に基づいた国長のアレンジである。国長はその「銅板近江八景」の浮御堂を、遠近感まるだしのお堂にして、さながらそびえ立つかのような大伽藍として描いている。その他、急激にせまる琵琶湖の対岸や、実際より遠方に望む堅田の集落からのびる橋、連なる落雁の列など、見る者はその誇張された面白さを味わえるようになっている。

なお、この他に、石山秋月や唐崎夜雨、粟津晴嵐などが「銅板近江八景」から図様を借用している。

ちなみに、国長は、「新板阿蘭陀浮画」といった外国風景を描いた作品も残している。墓所は東京築地の円正寺にあり、文政十年没、四十もしくは四十余歳と伝えられる。

（横谷　賢一郎）

堅　田　落　雁

唐　崎　夜　雨

「近江八景」展終わる

平成六年二月一日から同月二十七日まで、二十八日間にわたって開催しました特別陳列「近江八景」は、おかげさまをもちまして無事その会期を終えることができました。

近年になく雪模様の日にみまわれたこの二月でしたが、開催期間中には、三、一五〇人の方々にこの展覧会を訪れていただきました。

今回の展覧会は、風光に恵まれた湖国を代表する名所として、古くから多くの人々に親しまれてきた「近江八景」を主題とした作品について、館蔵品を中心に寄託品を交えた約四〇件の美術工芸品により紹介いたしました。展示品の中では、屏風に描かれた湖国の生活風俗や、鮮やかな色調をたたえた歌川広重や伊藤深水の版画作品、そして蒔絵や袱紗における華麗な意匠の工芸品などが特に好評で、人々の間に広く浸透し様々な形で愛好された近江八景の世界を味わっていただきました。

なお、期間中に以下の講演会を開催しました。

・二月五日木村至宏本館館長による講演会「近江八景と湖国」。聴講者九七名。

・二月二十七日展示品解説。聴講者五二名。

博物館日記抄

平成5年12月
平成6年3月

12月16日 滋賀県近江歴史回廊フォーラム開催される（市長・館長パネリスト、於・市生涯学習センター）

18日 玉置通夫氏（毎日新聞大阪本社）来館

22日 吉田一郎・西川丈雄両氏（長浜市史編さん担当）来館

1月2日 臨時開館（3日も）

6日 平常開館、竹内淡々美術館副館長・佐々木進氏（栗東歴史民俗博物館）来館、館内会議開く

7日 常設展をテレビ東京取材

8日 親子歴史講座（おこぼまつり見学会）

14日 第9回歴史博物館協議会開催、十河泰雄氏（福井市）来館

15日 第79回土曜講座「正月行事についてI」（講師　和田光生学芸員）

17日 （仮）伝統芸能センター起工式（旧大津営林署跡）行われる

18日 佐藤泰宏氏（文化庁美術工芸課）来館

21日 第28回歴史博物館収蔵品収集審査会開催

22日 第80回土曜講座「正月行事についてII」（講師　和田光生学芸員）

27日 歴史博物館企画委員会開く

2月1日 特別陳列「近江八景展」開催、取材にNHK・関西テレビ・BBCなど、館内会議開く

5日 記念講演会「近江八景と湖国」（講師　木村至宏当館館長）

9日 県書き初め展開催される

19日 特別陳列展示品解説（講師　横谷賢一郎学芸員）、石丸正運氏（県立近代美術館）来館

25日 定期監査、兼康保明氏（県文化財保護協会）来館

26日 第81回土曜講座「平成五年度遺跡の発掘調査報告I」（講師　市文化課田中久雄技師）

27日 特別陳列「近江八景展」閉幕（観覧者数三、一五〇人）

3月3日 館内会議開く

4日 堅田学区自治連合会婦人部・名古屋地方裁判所一行来館

5日 第82回土曜講座「平成五年度遺跡の発掘調査報告II」（講師　市文化課福田敬技師）

9日 近江写人展開催される、沙加戸明氏（響応寺）来館

12日 親子歴史講座「大津の古墳を探険しよう」

15日 今日から県内特別展普及啓発をはじめる（17日まで）

16日 岡田章一・知念理両氏（兵庫県立歴史博物館）来館

19日 第83回土曜講座「近江の古墳をさぐるI」（講師　吉水眞彦学芸員）

23日 歴史博物館企画委員会、第29回歴史博物館収蔵品収集審査会開催

25日 上妻亨氏（立命館大学）来館

26日 第84回土曜講座「近江の古墳をさぐるII」（講師　吉水眞彦学芸員）

27日 劉天明氏（中国安徽省文联副首席）ほか7人来館

博物館だより　第18号
発行日　平成六年四月二十八日
編　集　大津市歴史博物館
発行所　大津市御陵町二―二
大津市歴史博物館
電話（〇七七五）二二―二一〇〇㈹